

# 信用論

天利長三

- I マルクスの貨幣・信用論の骨子
- II 信用の史的発展と貸付資本の基本的性格
- III 近代的信用組織——信用市場・銀行活動
- IV 信用と現實資本との關聯
- V 結語

## I

1  
マルクスの貨幣理論が、單純商品經濟における商品の省察に端を發していることは、すでにその思索が獨特の立場のうえに築かれ、方向づけられていることを物語っている。商品の分析から照し出されたものは、ほかならぬそれに含まれた二つの要因、すなわち Gebrauchswert と Wert との矛盾という性質のものであった。つづく Wertform の分析から、貨幣という範疇が、商品に内在している二つの要因の對立の必然的な外部的表現にすぎぬことが導き

だされ、ここに陥りやすい Geldrätsel をあかすみに出したというわけである。少しく、その説くところを顧みるならば、マルクスの貨幣論が、Nominalismus とそのづから異なるものがあることはほぼ推定されるところでも、このことから、ただちに Metallismus 或は Warengeldtheorie と同一視し去ることも到底許されない。貨幣を商品とみる意味において相通するもののあることが認められるにしても、マルクスによれば、貨幣は、私生産者の社會の生きた現實から導かれたものであり、富の社會的性質の獨立した Inkarnation であり、Ausdruck である點で、他の商品と異り、(Das Kapital III S. 620) まことに物化せる人間關係の如實の姿をあらわしているものであるといわねばならぬ。ここでは、貨幣についての Nomo か Phy かの對立的な結んで解けざる論争も、おのづから氷解することを思わせるに至っている。<sup>\*</sup>そこには、多くの異論も唱えられうるであろうが、この貨幣觀をもいとして展開される貨幣の基本的機能は、Mass der Werte というわけである。ただ、ここでは、貨幣商品が觀念的なものとして、すなわち、商品所有者の頭腦のなかで假想せられたある金量が、觀念的に商品と等置せられるにとどまり、貨幣は計算貨幣としてあらわれるとみる。この機能を果しうるがゆえに、貨幣は、いま一つの機能、すなわち、それ自らの Leiblich なるものをもつてするか、或は代用物を通じて、Zirkulationsmittel という役目を果しうるかが説かれる。問題は、價值尺度として、流通手段として機能する貨幣が貨幣としてあらわれる形態をいかに考えるかにある。マルクスは、この第一の形態を Schatzbildung にもとめ、商品轉形の連續としての販賣と購買とが中斷せられて、販賣がこれにもなつて、これを補充すべき購買をとまわなくなるところに、その根據を見出すのであつて、後にのべるごとく、發達した資本主義社會において、銀行という貯水池に集中せられるものこそ、この退藏貨幣に他ならない。<sup>\*\*</sup>マルクスの説くいま一つの形態は、商品流通の發展にもなつて、商品の讓渡を價格の實現から時間的にひき離す事情に即して把えられるものであつて、ここでは貨幣は Zahlungsmittel としてあらわれると考ふるわけである。ここでの貸付取引

は、等價の回收が時間的に延期される (Kapital III S. 885) という點で賣買取引とその性格を基本的に異にしている。新しいこの社會關係のひろまるにつれ、支拂手段としての貨幣の機能は、流通手段としてのそれを犠牲として、くりひろげられ、それぞれの支拂が相殺せられる限り、貨幣は計算貨幣として全く觀念的なものであつて、ただ何らかの原因によつて、支拂の連鎖が斷たれ、相殺の機構が攪亂されるときにのみ、貨幣はその觀念的な存在から黄金の現身ともいふべき本然の姿にたちかえることになるというわけである。所謂 *Kreditseld* は、この機能を俟つて理解さるべきものであり、その直接の形態としての爲替手形、その流通を基礎とする銀行券・小切手などは、相殺によつて、貨幣たる機能を果すと観ていこうとするもので、*Kommerziellen Kredit* を *Das moderne Kreditsystem* の *Naturwüchsige Grundlage* をなすとみる思考は、すぐれて端的に表明せられてみるとよい。

\* Friedrich Engels は、この間の消息をつぎのごとく述べている。すなわち、「社會の富がその實を示すのは、個人が自らの欲望をみたすために、質的に異つた使用價值を相互に交換するからにすぎない。……個人の富は、貨幣の媒介によつてのみ社會的富として實現される。この富の社會的性格は、貨幣という物のうえに体现される」と。(Kapital III S. 881) 榎田民藏全集、第二卷、「價值及貨幣」四〇六頁、友岡久雄著「貨幣・資本・信用」四三頁参照。

\*\* 貨幣の本質をば、*Store of value* にもとめるケインズの貨幣觀は、この貯蓄現象をめぐつて、貨幣額の分布と移動が行われ、生産財・消費財の價格面に起伏があらわれ、經濟社會の運動がみられることを主張せんとするものであるが、マルクスの立場からみれば、この運動過程を外面的に均衡の問題としてのみ考え、内面的な支持とか機構について腐心するところがないということになるであろう。

單純商品生産から資本主義生産に進むにつれ、貨幣は資本に轉化せられ、一つの與えられた價值から、一つの自己増殖的な價值となり、貨幣には、それが貨幣としてもつ使用價值のほか、いま一つの追加使用價值、すなわち資本として機能するという使用價值が與えられることを主張する。(Kapital III S. 370-371) \* *Ueber Mehrwert* についての探

索を措いて問わぬとすれば、Industrie Kapitalが相つゞつとる形態變化、(その流通過程のうちでとるGeldkapitalと、Warenkapitalと)の形態、生産過程の内部でとるProduktivem Kapitalという形態の變化)と信用の交渉・關聯がかえりみられなくてはならぬ。われわれは、信用關係については、さきに支拂手段としての貨幣の機能の分析に觸れて、單純商品流通の信用關係のなかに、そのKristallisationの可能性(Kapital I S. 145)のひそんでいとみる論據を顧りみたのであるが、この現實的な結晶化に一步進めるものが、商業信用の發展に他ならないとみる。ここで商業信用が、貸付取引によつて、Wirkliches Kapital(産業資本・商業資本)の運動の實現を媒介する性質のものであり、貸付けられるものが、所有者の手にあつて商品資本の形態をとりつつ貨幣に轉化せられねばならぬ資本である意味において、それは商品の轉形、いいかえれば、相互に従屬し結合せられている再生産過程のStoffwechselを媒介するものである。しかし、これは、商品の實現過程で、企業家が企業家として、相互にあたえあう信用という意味においては、賣買取引が貸付取引を伴うにすぎないとみる。(Kapital III S. 283)ところが、この企業者相互の間の貸付關係としての商業信用が、銀行業者によつて、企業者にあたえられる貨幣の前貸にVergnicktされたものが手形割引であると解するのであるが、ここでの貸付を、いまだ名目的のものとどまるとみとる限り、ここでの銀行業者はGeldhändlerの性格をもつにすぎないといわなくてはならない。マルクスにおいては、資本の所有と資本の生産への充用との分離、すなわちLeihkapitalと産業資本との矛盾のうちに、信用關係の結晶化を觀ていこうとするものであつて、ここでは、債權者と債務者との役割は、資本の再生産過程の一定の資本家のうえに固定され、貸付取引は、貸付資本の唯一の流通形態となり、この貸付資本、すなわちZinstragende Kapital, Moneyed Capitalは、すでに獨立の對立された、そしてその對立においてのみ自己を主張する資本となることを主張せんとするものである。マルクスは、ここに全く新たなProduktionsverhältnis、特殊の内容と質的特徴をもつてゐる獨立の生産關係を讀

みとるべき態度をもつてのぞんでゐる。いまや、貨幣資本家が直接にか、また間接に銀行を通じてか、または銀行自身か、機能資本家にあたえる Bankkredit が産業資本の循環から解放された Brauchliegendes Kapital の運動を實現させ、かくして、銀行と産業的企業との關係が恒常的となり、緊密となるにつれて、この銀行信用の意義は増大し、それが典型的な信用形態となり、商業信用は、もはやその純粹の姿で現われること少く、銀行信用によつて複雑化されることますます多くなる結果として、商品とその對象とした信用取引にかわつて、貨幣を對象とする信用取引が如實の姿をあらわしてくるといふ。マルクスの論理によればこのようにして、貨幣・信用の發展こそ、使用價值と價值、乃至は貸付資本と産業資本という統一物の對立物が分離し、この對立物が外化し、獨立化することのうちにあるとみる態度をもつて貫らぬかたである。しかも、信用が貸付資本の運動によつて特徴づけられている限り、信用理論が資本理論に立脚し、その貸付資本が貨幣形態における資本である意味では、信用理論は貨幣理論に立脚してゐるともいえるのであつて、その波平らかな論旨の展開には、一抹の執着・魅力をさえ感ぜしめることは争ひ難いであらうが、その叙述展開の脊後につねに潜められているものが、實に、マルキシズムの世界觀としての辨證法的唯物論にあるといわねばならない。<sup>\*\*\*</sup>それは、まづ、思惟と存在との關係にたいして、存在・物質を第一義的なものと考へ、したがつて、精神（意識）は物質によつて決定されるとともに、その思考の出發點としての物質をば、常にその存在形態としての運動・發展と關聯して思考する。すなわち、事物の運動・發展の動因をば、物質そのものうちに汲みとり事物を單一なものではなく、矛盾の統一、對立物の統一であるときめ、この二つの對立物が事物のうちにあるところから、兩者の相争うことによつて運動と發展が起るとみるのである。たのような社會變革への情熱を深く藏した思想動機については、すでに嚴正なる批判が試み<sup>\*\*\*</sup>られているが、わたくしは、むしろ、この立場を是認したあとに、このような立場のもとにおいて、到達される事實認識が、他のそれと如何なる相異點をもち、また、この

立場によるときに、どの程度まで事實認識に接近しうるかというところに問題點をもたざるをえない。マルキシズムの豫言者的態度そのものについての反省にもまして、當面のわれわれのなすべきところが、一つにかかつてこの點にあるといたい。このような見地から、以下「資本論」第三卷第五篇を中心に、マルクスの信用についての所論を顧みることによつて、それがもつ、極めて獨特性格を描き出すとともに、いま一つは、さきに小樽商大開學記念論文集第二分冊において試みた「資本蓄積論」という流通論ぬきの再生産過程の分析を補うことによつて、資本主義生産の發展とともに、この生産過程に隨伴する貨幣・信用現象が、それ自ら發展し、むしろ生産過程に對立して獨立の存在を主張し、やがて生産過程そのものを支配するに到る必然をもつとされているその根據を究明し、あわせて兩者の關聯を考察したいと思う。

\* いかなる特殊の事情が、貨幣を資本に轉化させるかという問題についてのマルクスの解答は明瞭を缺くといえないだろうか。

\*\* トラハテンベルグは「信用はその發生のそもそもの初めから、歴史の辨證法的發展の積極的に作用する動力の一つとしてあらわれている。信用なる範疇にその特質づけを見出す生産關係は、その間斷なき辨證法的發展を規定する内在的固有の矛盾を自らうちにもつている」とみる。(トラハテンベルグ、川崎己三郎譯「現代の信用及び信用組織」三頁)

\*\*\* この立場にたいして厳しい批判を加えるとともに、さらに進んで「哲學離脱」の立場から、Logical positivism を強調されているものとして、山田雄三博士の勞作「社會科學の基礎」とくに第二章をあげなくてはならぬ。既に、その主張に限りなき共鳴を抱きつつも、敢えて「陳腐な」マルキシズムの理論に停滯し、その究明に蛇足を加える所以は、この拙稿があげてこれに答えてくれるであらう。

\*\*\*\* さしたる重要さをもつものではないが、總じてマルクスの著述には、信用について体系的な説明はなく、銀行概念の定義も見當らない。「資本論」第三卷第五篇は、マルクスの草案にすぎず、しかも、そこには完成された草案はおろか、内容をみたくすべき輪廓的な概要さえなく、ただ一度ならず覺書や評言や拔萃形態の資料や亂雑な累積に終つているところの完成への一端緒があるにすぎぬ。(Kapital III Vorwort S. 6)

因に、トラハテンベルグは、信用理論の体系化の試みの困難として、マルクスの時代にさほど意義ももたなかつた新たな事實、すなわち、(一)銀行制度の集積、(二)銀行役割の變化、(三)銀行の産業に對する役割の變化、(四)貨幣機構の變化、(五)信用機構の變化、(六)資本所有と資本機能との分離、(七)擬制資本の増大・發展、(八)金融資本の新範疇の成立、(九)資本と國家權力との癒着をあげている。(前掲書、三一―八頁)

## II

ひともし、*Materialistische Geschichtsauffassung* を是認し、すべての人間の社會生活の個々の型の社會關係が、物質的なものとしての生産關係、もしくは階級關係によつて規定されること、すなわち生産の一定の形態は、消費・分配・交換の一定の形態を、これらの種々の契機相互間の一定の關係を條件づける〔*Kritik Vorwort XXXIV*〕ことを固執するならば、信用關係が社會の基本的な生産關係によつて制約され、それが單に信用の必然性を規定するのみでなく、究極において、信用の運動法則をも規定することについて、一點の疑義さえさしはさむことはないであろう。繰返していわねばならぬことは、マルクスが信用をば生産關係として、一定の型の社會關係としてみ、しかも、それば限定された歴史的範疇として、いいかえれば、永久的な範疇としてみないという態度である。ところが、具體的・現實的に、それぞれの經濟體制が、異質的な固有の生産關係によつて特質づけられている限り、近代にとつて、何をもつて典型的な支配的な關係とみるかが、問われなくてはならぬであろう。われわれは、信用の成立・發展過程についての叙述に眼を轉じて、そこから近代的信用の問題への接近を試みよう。信用についてのマルクスの歴史的・論理的叙述のうちに、登場してくるものは、貨幣取引業・*Wucherkapital*・*Geldhandlungskapital*の三つにして、これらは、ともに前資本主義時代にとつてのみ特徴的であり、前期的な生産・流通過程を基礎としていとされる。ま

づ、貨幣取引業は、その成立の直接の動機を貨幣制度の錯雜にみられるとし、この必要をみたす特殊の職業として具體化された最初の形態として、中世の *Wechselgeschäft* をあげ、兩替業と地金銀取引とが、地方的な鑄貨であるとともに世界的な貨幣である二重の貨幣機能から生れた (Kapital III s. 350) ものだとみる。つぎに、利附資本の古代的な形態ともいうべき高利貸資本はその雙生兄弟たる商人資本とともに、資本主義の様式の久しき以前に行われ、多種多様な經濟的社會的形態のもとに見出される *antediluvianisch* な形態に屬するもの (Kapital III s. 351) とみるが、それが利附資本としての性格からすればその循環形態は、 $Q-Q'$  でなければならぬとし、この高利貸資本の機能が、貨幣取扱資本の機能によつて、補足され複雑化されて、おのづから貸付資本の機能に轉化したとみるところからみて、近代信用制度の確立を探らんとするには、この轉化の過程を顧みなくてはならぬ。マルクスの説くところは、これが主として資本の循環の事情によつて規定されるというにある。というのは、さきに見た三つの資本が、それぞれの循環を描きつつ、互に並列して不斷に行われてはじめて、間斷なき資本の循環過程が保證されるわけであるが、流通過程のうちにある資本の機能が、特殊の一資本の獨特の業務として獨立化され、分業によつてある特殊の種類の資本家に割り當てられた一機能として固定するところに、問題を解く鍵があたえられているからである。ここにおいて、商品資本は *Warenhandlungskapital* または *Kommerziellen Kapital* (Kapital III s. 317) 、貨幣資本は貨幣取扱資本に轉化されるとみる。 (Kapital III s. 346) 後者の業務は、貨幣の出納と貨幣・貨幣資本の保管に盡きるといえよう。この貨幣取扱資本が、高利貸資本と同じく、 $Q-Q'$  の循環を描くにしても、ここでは、これらが、いまだ前期的であるところからみて、出發點の  $G$  と歸着點の  $G'$  との間に介在するものは、本來の資本の生産過程の循環ではなかつたといわねばならない。ところが、産業資本の全流通資本としての貨幣資本と商業資本との間の一定の關係は、循環過程において絶えざる變動にさらされている。資本の多くが商品形態をとるとき、貨幣の不足が目立ち、商品の減少するとき、貨

幣資本の過剰が際立つ。前者の場合に、全資本を増大すれば、他の時期に、資本が遊休し、全資本の利用の面からい  
えば、非合理的・不生産的となり、利潤率は低下の傾向を示し、後者の場合には、資本が最も集約的に利用されるに  
しても、間断なき循環は困難に陥り、利潤率はたとい上昇傾向を示しても、利潤の総量は減少することになる。この  
困難な問題は、ただ資本循環の外部にある貨幣によつてのみ解決される他はないことが明かにされる。マルクスによ  
れば、機能資本家は、貨幣取引業・高利貸資本・貨幣取扱資本の融合の結果として生じた貸付資本にこの源泉を見出  
すとみる。<sup>\*</sup>このようにして特殊の貸付資本が現實の再生産過程の機能から分離するに至れば、全體としての總社會的  
資本の回轉は加速度化され、個々の機能資本家の所要貨幣資本の量は軽減されるとともに、その後、あらゆる貨幣資  
本が貸付資本とみられ、自己資本のみによる機能資本家までが、自己の資本を貸付資本と看做すに至ることともな  
る。ただ、ここでわれわれは、近代の信用を特徴づけるこの貸付資本についての分析のうちに、貸付資本と産業資本  
との辨證法的態度が覗われるのであるが、いまこの關聯を問わないとしても、これまでの叙述からして、近代的信用  
制度の基礎過程としての生産過程との關聯を等閑視し、種々な形態の資本の同時的な存在と一形態の資本の他の形態  
の資本への轉化とが、資本主義經濟組織の基本的な特質であることを理解しない態度にたいしてマルクスの論鋒のむ  
けられていることは想像に難くない。<sup>\*\*</sup>

\* このように貸付資本が、種々なる機能とその融合の結果として發生したにしても、マルクスはそれを平穩的な變質とはみない  
のであつて、このことからみてThe old Lady of Threadneedle Streetについての歴史も闘争のそれであるとみるのであろう。

\*\* このような視角からマルキストによつて批判の對象とされてゐる理論としては、L. A. Hahn; Volkswirtschaftliche Theorie  
des Bankkreditis, 1930. R. G. Hawtrey; Currency and Credit, 1923. J. Schumpeter; Theorie der wirtschaftlichen  
Entwicklung, 1935. なあげることが出来る。

さて、近代的信用の中核ともいへべき貸付資本は、マルクスによれば、一方では一定額の購買手段・支拂手段とし

てあらわれ、他方では、資本として自己増殖的な価値としてあらわれ、(Kapital III S. 545) この二重的な性格は、互に他を前提として自己のうちに包括しているといつてよい。<sup>\*</sup>まづ、信用取引の對象としての貸付資本のもつ資本としての性格について、資本一般と貸付資本との關聯がかえりみられなくてはならないが、その抱懐するところをすぐれて端的にあらわした一節、すなわち *Das zinstragende Kapital ist das Kapital als Eigentum gegenüber dem Kapital als Funktion* (Kapital III S. 415) のうちに、あらゆるものは展べられているといいたい。そこには資本と貸付資本が、その反映する社會關係の型を異にすることを思わせるものであつて、余剩價值を領有するものとしての資本が、勞資の關係を反映するのにたいして、貸付資本は、余剩價值の分配として、そこでは貨幣資本家と機能資本家との關係を反映するという態度をもつてのぞんでゐる。(Kapital III S. 414, 55, 415) もちろん、分配が領有をも含むものである限り、貸付資本が資本の關係に立つことを否定するものではないであらう。いづれにしても、ここから質的に異つた生産關係を反映する質的に異つた範疇としての利潤 利子という余剩價值の轉化された形態が導き出される。さきに見たごとく貸付資本は利附資本であつて、ここに貸付資本を規定する構成的な徵標をみてとるのである。なるほど、利子は、あらゆる形態の資本につきものであつて、商業信用の授與者が、その商品價格に手形満期までの金利を加えた金額を手形價格として記載する場合にも、現に利子が考えられうる。このように、機能資本家が相互に商業信用を與えあう場合に利子として授受する金利計算部分をもここでいう利子とみるべきであらうか。マルクスの立場において、かかる利子をば、ただ單に貸付資本關係の外化を地盤として生じたものと觀ていこうとするものであつて、<sup>※</sup>本來の利子は、あくまで貨幣資本の貸付によつて生じ、機能資本家の手から貸付資本家に支拂われるものとする。それは、利附資本の運動形態が  $G-G-W \dots P \dots W-G-G$  の式にて示されうることく、利子の源泉、したがつて、その存在の可能性をば、貨幣資本が機能資本家の手で、現實に資本化されて資本運動を通じて利潤をうむとい

う點に〔Kapital III S. 405〕、いいかえれば、それが資本として機能し、平均條件のもとにあつて、Durchschnittsprofitをうむ〔Kapital III S. 385〕という思考にもとづいているが、あくまで利子が労働とは無關係な資本家相互間の單なる關係をあらわすにすぎないとみている。〔Theorien über den Mehrwert III SS. 611〕したがつて、利子は、これをQualitativにみれば機能資本家が借入資本を充用する限り、貸主に支拂わねばならない一つの利潤部分を示す一つの特殊なRubrikに外ならぬものであり、〔Kapital III S. 371, S. 405〕借主は、つねに、Wert plus Mehrwert (Zins) として返済しなければならぬとみる。〔Kapital III S. 386〕この故に、貨幣は戀を孕み、それは貸付けられるや、睡眠中も覺醒中にも、家にいるときも旅にいるときも、晝となく夜となく、利子を生む〔Kapital III S. 405〕のであるが、この場合、借主がこれをいかにふりむけるかは、借主自身に關した事柄であつて、その支拂うものが、資本に含まれている剰餘價值であり〔Kapital III S. 405〕、しかも、それがその具體的な貸付資本の助けをかりて生産された剰餘價值ではなく、資本全體によつて生産されたそれであることを見逃してはならない。では、利子の形で機能資本家が貨幣資本家に讓渡する剰餘價值部分の大きさを決定するものは、何であろうか。利子支拂の源泉が利潤であるとすれば全利潤のうちから Aufsichtslohn (wages of superintendence) に歸着する部分を差引いた残りが、恐らく利子の最高限界と看做されるのは理の當然ともいえる。〔Kapital III S. 391〕もとより、個々の具體的な場合に、利子がこの限界を越えることはあるにしても、貸付資本が、社會的資本としてあらわれる限り、平均利子が平均利潤の限界を越えることはできない筈である。このような事態が引續くならば、資本蓄積は中絶し、資本主義經濟の發展がやむとみるのであらう。これに反して、その最低限については、一見したところ際限なく、零まで低下しうるかのごとくであるが、そのことは利附資本としての貸付資本の否定を意味するといえよう。残された問題は、この二つの限度内において、Quantitativとしての利子が、いかに決定されるかでなくてはならぬが、この解答は、ここでの利子の動きが、一つに全く競争、すなわち貸付資本の

みの需給によつて決定されるというにある。利子には、競争によつて命ぜられた以外には何ら分割のうえでの法則ともいふべきものはなく〔Kapital III S. 397〕、二つの資本家間への利潤の分配を決定する事情と利潤の大きさを決定する事情とは著しく異つていて、全く相反した方向に作用すると考えられている。<sup>\*\*\*</sup>〔Kapital III S. 397〕

\* この点を具体的に表現すれば、貸主が百圓を借主に交付し、百五圓を回收する場合、百圓は單なる貨幣額としての貸付資本の價值であり、五圓は資本としての貨幣額の價值であるとみてよいであらう。

\*\* この立場においては、銀行が貨幣取扱業務に關聯して收受する商業利潤をも、利子としてとらえることは意識の錯倒以外のなにもものでもないのである。〔Kapital III S. 544〕

\*\*\* このように自由競争で確定される以外に、利子率の成立の余地がないとすれば、自然的な限界をおもわせるごとき *Natürliche Rate des Zinsfußes* の理論的根據は、否定されることとなる。〔Kapital III S. 390〕

資本としての貸付資本の性格は、これを他の資本と比較することによつて、ヨリ明かとなるのであつて、まづ(イ)それぞれがはたす機能の差異のうゑにあらわれているとみる。マルクスにしたがつて、資本が資本として存在するのが、ただ生産過程、すなわち *Ausbeutungsprozess der Arbeitskraft* の過程内においてのみであるとすれば、〔Kapital III Ss. 375-6〕 商品資本も貨幣資本も、その流過程において、資本としてではなく、商品または貨幣としての機能するにすぎないということが出来る。〔Kapital III Ss. 375-6〕ところが、貸付資本の運動が  $G—G'$  の二つの流過程のうち、資本としての運動を行うということを前提としていることは、さきに見たところであつて、このことから、貨幣所有者は、自己の貨幣を第三者に譲渡し、これを流通に投じて、資本としての商品たらしめるとみる。このように貸付資本が、貨幣を譲渡する人にとつてのみ資本であるのではなくて、また最初から余剩價值をつくり出すという使用價值をもつた價值として第三者に交付されるところに、その性格の一面が窺われるという。〔Kapital III S. 376〕

(ロ)さらに、それぞれがおびる形態の差異のうゑにもあらわれている。というのは、機能資本の運動が、商品と貨幣の

不斷の轉形という形をとるのにたいして、貸付資本がその運動のすべての段階を通じて、つねに貨幣資本の特殊な一形態にすぎないという點である。(Kapital III S. 376) すなわち、貸付資本がつねに貨幣資本であるところに、その第二の性格を汲取るべきだとみている。しかし、貸付資本が、このように貨幣資本であり、一つの Geldsumme であるにしても、(Kapital III S. 388) 全體としての循環過程の立場からみると、それが流通過程において、資本としてあらわれることについては、寸毫の疑いもない。<sup>\*</sup> さらに、それぞれの讓渡對象の差異からも明かとされるのであつて、機能資本が、商品の形態で讓渡されるのにたいして、貸付資本が貨幣の形態で讓渡されるという點である。産業資本の讓渡にたいしては、資本としての商品が讓渡され、貸付資本の讓渡に際しては、商品としての資本が讓渡されるというのは、(Kapital III S. 374) さきにみたごとく、商品として貸付けられた貨幣の使用價值が、資本として機能し平均利潤をつくり出すという立場において理解されるのであつて、資本としての貨幣のこのような使用價值こそ、貨幣資本家が産業資本家に讓渡するものに他ならないといえる。(Kapital III S. 385) (二)最後に、それぞれの増殖運動の差異からみるに、産業資本の運動も、貸付資本のそれとともに  $G'$  は  $G$  より大であるという外觀を呈しているが、マルクスは、貸付資本の貸出と返還とが、資本の現実的な運動の前後に行われて、この運動そのものとは、いささかの關係すらもたない法律上の取引によつて媒介される willkürlich な運動としてあらわれるとみる。(Kapital III S. 381) この意味するところは、貨幣を一定期間手離して、これに利子をつけて回収することが、利附資本そのものの運動形態であるにしても、貸付けられた貨幣が資本としてはたす現実的な運動は、貸主と借主との間に行われる取引の外部に横たわる一つの操作にすぎず、この取引の内部においては、このところは消えうせて目に見えないというにある。(Kapital III S. 381-2) いかえれば、貨幣を資本として貸付けることは、もともと貨幣が現實において資本として充用され、それが循環を上げて、貨幣の形態で出發點に回流するまでの過程を辿ることを前提条件とし、したがつて、信用取引が事實上、この

條件によつて規定されているにもかかわらず、このことが、取引そのものには現われていないというわけである。この意味では、貸付資本が現實資本の運動の無概念的な形態であることともなろう。[Kapital III s. 387]ただこのように、貸付資本額の運動（増殖）と、その資本としての利用との間に直接の關聯がみられないところに、マルクスは、生産關係の最高度の *Verkehrung* 及 *Versachlichung* をみこころるのであつて、最もけばけばしき *Kapitalmystifikation* の姿である。[Kapital III s. 428] 貸付資本のもつこのような *Irrational* な性格は、資本の所有と機能との分離が擴大されるにつれて、數多くの擬制をうみ出し、資本主義經濟の寄生的要素を増大することともなりえたとみるのであつて、これこそ、所得の *Kapitalisieren* にもとづく *Fiktives Kapital* の成立・發展に他ならない。一定額の余剩價值請求權としての貸付資本の所有者は、一定の所得を受取る權利があたえられているところから、逆に、規則的に受取られる所得は、すべて貸付資本からの利子とみなされ、この資本の大いさは、その利子、すなわち所得で決定されることになる。このようにして、擬制資本の成立のみならず、その量的規定のあたえられる所以を明らかにするのであるが、その主な *Wertpapier* として、國債・社債・株式を考へていたようである。*Staatspapier* は、國家がその所有者に國民所得の一部分としての國庫收入より毎年一定の所得を支拂うという債權であるが、マルクスによれば、その幻想性・擬制性は、それが何らかの現實資本の轉化形態といふべきものではなく、一種獨特の價格で賣買される商品であり、その市場價值は、現實資本の價值に變化がなくともその名目價值とは異つた姿で決定されるとみるという點にある。[Kapital III s. 511, 521] このことは、企業の債務證券、すなわち株式・社債についても同様とみるのであつて、とくに重要な役割を占める株式は、所謂請求權であり、將來の生産にたいする債權名儀であり、所得證券にすぎず、その價格を決定するものは、株式が表面上代表しているようにみえる資本ではなく、その株式によつてえられると豫想される所得に他ならないと説く。このことから、株式に體化されている資本が、極めて浮動的で、伸縮性に富

み、その變動が、現實資本の再分配の手段乃至は指標として役立つとしても、その絶對的な大きさの變動をあらわす指標たりえないという歸結が導かれる。しかし、その反面において、擬制資本が大きな可變性、擴張性をもつていふことが、資本市場を鋭敏な伸縮性に富んだものにするにしても、資本主義的な發展を容易にし、資本主義的生產様式の限界を擴張することを見逃してはいない。[Kapital III S. 47, S. 49] ただ、このように、一方では現實的資本の貨幣形態であるのに、他方では擬制資本であり、一方では現實的資本の運動を反映するのに、他方では余剩價値の運動を反映するというこの貸付資本の矛盾が、生産方法それ自體の他の大きな Organischen Umwälzungen と關聯した一要素として、力強い Hebel となる [Kapital III S. 65] という態度が叙述のなかに一貫して展開されているが、これらの點は次節以下において觸れることとしたい。

\* 信用取引をば、商品取引になぞらえて思考する態度の妥當性は、この立場にたつとき、吟味の一つの指針があたえられるであらう。なお貨幣資本一般としての流通手段と利附資本としての流通手段に關聯して、マルクスが、「資本論」第四篇、第二十八章において、Geldform der Revenue と Geldform des Kapital との區別を強調し、銀行學派の Toke, Fullarton の通貨對資本についての見解に厳しい批判をなげかけていることを、附言しておかねばならぬ。

貸付資本については、資本としての性格のほか、いま一つ貨幣としての性格を考察せねばならぬ。貸付資本をば、貨幣として購買・支拂手段の一定額、すなわち商品に實現されうる請求權の一定額であるという觀點からみれば、その増減は、流通手段の増減と關聯しているといえよう。貨幣は單なる貸付行爲によつて、すなわち、預金への轉化によつて、貸付資本となり、[Kapital III S. 54-5] 銀行貸付の増加は、購買・支拂手段の數量の増加、すなわち請求權の數量的な増加を意味している。マルクスは、流通手段として考察された貸付資本が、その運動において、貨幣流通の法則にしたがうとみる。すなわち、(1) 流通手段の數量と資本の循環過程との間に一定の關係があり、資本の循環

過程が、流通手段の流通と數量を規定し、(ロ)流通手段の數量と現金(金屬貨幣)との間に一定の關聯があり、流通手段の流通の基礎をなすものが、金貨であるというわけである。ところが、一定額の購買・支拂手段としての貸付資本は、貨幣、否貨幣表章にさえも體化されず、ただ貨幣請求權のみに體化されるということがありうるのであつて、こゝでの貸付資本は、資本としての貸付資本が擬制資本であつたと同じく、擬制的でありうるといわねばならない。マルクスは、銀行資本が、貨幣にその物的な體化をもたず、銀行の債權である意味において、その大部分が擬制的であること〔Kapital III S. 517〕銀行の準備金＝金準備でさえ、その一部が外國銀行の信用である限り、擬制的であるという。

〔Kapital III S. 517〕

### III

信用取引の對象としての貸付資本の性格が明かにせられたところから、進んでこの運動を顧みなくてはならぬが、この點こそ、唯物史觀を、もととするマルクスの立場からみるとき、極めて重要な意味内容をもつものだというところになるであろう。<sup>\*</sup> われわれは、この貸付資本の運動についての叙述から、近代的な信用組織をいかに把えているかを、ここで省察せねばならない。信用は貸付資本の運動であり、この運動のなかで、價值の増殖がなされる。ところで、この増殖が可能なのは、貸付けられた貨幣のうち奇蹟的な自然的な性質があるためではなくて、一定の社會的關係、すなわち資本主義經濟の一定の條件のためである。いいかえれば、資本主義經濟においては、あらゆる貨幣額が余剩價值を領有する手段として用いることができるからである。このことは、貸付資本が現實資本に轉化されるといふ客觀的な可能性、つまり資本の再生産の客觀的な可能性に依存していることを物語つてゐる。したがつて、貸付資本の運動は、現實的資本の運動、すなわち資本の再生産過程としての基礎をもつていゝといわねばならない。<sup>\*\*</sup>

これが、これまでのところから導き出される歸結である。ところが、貸付資本の運動は、このように資本の運動によつて制約されつつも、他面において、それ独自の運動法則をもつていゝとみるのであつて、われわれは、貸付資本の需給の出合の場としての信用市場と銀行の機能の視角から、そのいゝんとするところを顧みることとしよう。

\* マルクスは、「資本主義生産における信用の役割」(第二章)と題して、そこでは(1)利潤率の均衡化(2)流通費用の節減(3)株式會社の成立(4)資本所有にたいする絶對的な支配を指摘し、信用市場における純投機的な性格の擴大、獨占による *Aufhebung des Kapitals als Privateigentum* などを説き示している。

\*\* この立場からみると、貸付資本のなかに永久無限に、社會の富を増大させる不可思議な力を想定する思考とか、貸付資本と現實資本との差異をみないで、貸付資本の運動を物的資本の運動であるとする主張のうちに、一つの輕視し難い缺陷が横たわつていゝと云ふことになるであらう。

信用市場の對象をなすものが、産業資本に對立した、特殊の使用價值をもつ貸付資本に他ならないとすれば、そして、その利用といふことが、その利用過程において否定されずに保存されるとすれば、そこに、商品市場・労働市場とはおのづから異つた性格がみられるであらう。のみならず、利附資本が、その出生の一切の特殊の痕跡をすてて貨幣といふ無差別な *gleichmässig* な姿容であらわれ、その總量をとつてみても、その個々の部分をとつてみても、つねに運動において自己を増殖するといふ使用價值をもつていゝところから、信用市場を他の市場からわかつかひまゝ一つの性格をあげることが出来る。すなわち、ここでは、特殊の部門間の競争は見受けられず、借手と貸手は互に一括され、需要の形態についていゝば、一つの階級の重みがこれに對立し、供給についていゝば、それは貸付資本として一括され、少數の貯水池に集められた社會の貸付資本としてあらわれるといふ。(Theorien über den Mehrwert III Ss. 536-7) どのような信用市場のもつ性格から、個々の貸付資本の運動法則が、總貸付資本の運動法則にしたがうことともなるのであつて、利子率の運動がこの如實の姿をあらわしてくるといふわけである。といふのは、利子率が何よりもまづも

つて一般的信用市場にて決定されて、それが個々の貸付資本の取引の基準となる、すなわち、一般的な貸付歩合が部分的な利子率を決定するからである。ところで、すでにみたごとく貸付資本は、一方では一定額の購買・支拂手段であるとともに、他方では自己増殖的な価値であるという二重の性格をもつところから、嚴密には、信用市場について Geldmarkt と Kapitalmarkt の區別を明かにしなければならぬであろう。<sup>\*</sup> 個々の取引にあつて、貸付資本のこの二つの性格のうちの何れが重要性をもつかということ、借主がその借受けた貨幣の助けをかりて、何れの要求をみたすかということが、彼此の區別を明かにする。例えば、商品形態の資本とか有價證券をもつ資本家のもとめるものは、その形態轉化のための一定額の購買手段であり、したがつて、彼らは、貨幣市場にあらわれるとみられるが、これに反して、産業資本が社債の發行によつて、債務を締結せんとするとき、この企業のもとめるものが追加資本であり、したがつて、彼らは資本市場にあらわれるといわなくてはならない。信用市場をば、このように二つの側面にわけて考察するのは、マルクスの立場からみて、貨幣の貸付としての貸付資本の運動が、單に資本の分配を反映するのみに、資本の貸付の場合には、現實資本の再分配をひきおこすという點が強調されているからである。のみならず、貸付資本の運動の矛盾から、この二つの市場が互に異つた様相をとりうることを思考されるのであつて、極端な事例として、購買・支拂手段としての貸付資本が過剰でありながら、貨幣資本としての貸付資本の不足することさえありうる筈である。<sup>\*\*</sup>

<sup>\*</sup> マルクスにおいては、この區別は、必ずしも明確でない。貨幣市場では、比較的短期の取引が取結ばれ、資本市場では比較的長期の取引が取結ばれるという主張に問題があるのではない。むしろ、このことから、この期間という徵標を貨幣市場と資本市場の構成徵標とみるのが無理といえないであらうか。なぜなら、もともと期間という概念は相對的であつて、國民經濟部門の異なるにつれて變化し、そこに嚴密な限界をもうけることが至難だからである。

<sup>\*\*</sup> 現實分析においてとくに考慮すべきは、これらの關係ではないであらうか。もとより、貸付資本一般の過剰も可能であらう

が、購買・支拂手段としての貸付資本の過剰と、貸付資本の過剰とを區別せねばならぬ。これが同一現象の二つの側面であるが、二つの相異つた側面であるところに困難が潜んでいるといえよう。

さきにもみたごとく、信用市場において、貸付資本の出合がおこなわれ、利子は、その出合の結果として、その最高と最低の限界内で決定されることになる。いま、この利子の問題を採らんとするには、貸付資本の需給を如何にみているかを顧みなくてはならない。まづ、信用市場における供給が、第一に、純粹の貨幣資本の蓄積、第二に、一般的に貨幣形態にある現實資本の供給、第三に、貨幣所得の蓄積、第四に、信用制度そのものの作用、などの結果として形成されるというように、マルクスの叙述をば整理して考えてみよう。第一の貸付資本の蓄積は、いうまでもなく資本を貸付資本としてのみ利用する貨幣資本家によつてなされる資本の蓄積であるが、一般にいう資本の蓄積が、生産資本と商品資本の蓄積、したがつて擴大再生産過程を意味するのたいして、ここでの蓄積が社會で生産された余剰價值にたいする所有權名儀と解することは、マルクスの立場からみて決して理由のないことではない。(Karlson, p. 50) いづれにしても、この蓄積が、資本主義經濟の發展につれて増加する傾向を辿るとみる。第二の貨幣形態にある現實資本の供給については、産業資本の循環からうまれる遊休貨幣資本のことを意味している。すでに明かにされたごとく、資本の循環がたえず更新されうるためには、 $W'$ が $G'$ に轉化されなくてはならぬ筈であるが、この $W'$ から $G'$ への轉化の過程に、問題が残されている。まづ、固定資本の更新部分にあたる貨幣額の生産資本への轉化は、それが一定の大きさに達した後にはじめて可能となるのであるが、固定資本の價值は、各循環が終るごとに、なしくづ的に貨幣に實現されるため、一部分の資本は、一定の期間にわたつて貨幣形態に凍結せざるをえない。つぎに、流動資本は、一回の資本の循環が終るごとに、貨幣形態で再生産されるが、流動資本の貨幣形態での再生産の時期とその商品形態への轉化の時期の一致に困難を伴う以上、この資本も多少の期間にわたつて貨幣形態にとどまらざるをえない。

のみならず、勞賃が勞働力の使用後に支拂われること、原材料の購入が一時になされるものでないことなどを考慮に入れるとき、この場合、長期間にわたつて貨幣資本の形態にとどまるといわねばならぬ。最後に、余剩價値の轉化形態としての貨幣資本についても、やはり同様の結論がえられるのであつて、資本家の個人的消費部分を除いた部分は、擴大再生産のための投資を豫想されているが、この目的に役立ちうるためには、それが有る程度に達せねばならぬ意味において、この場合にも貨幣形態での退藏が不可避とならざるをえない。このように、貨幣が不斷に貨幣形態にとどまらざるをえないのは、生産過程そのものにもとづくものであるにしても、さらに、景氣の狀況・生産の速度・生産期間の長短などの事情がこれに加わつて、ここに貸付資本の供給を増減せしめるとみる。ただ借入資本の場合には、この種の放出が信用市場への供給増加に及ぼす意味は乏しいといえよう。第三の貨幣所得（利子・企業利潤・勞賃）の蓄積が所得増加と信用制度の成長によつて助長されることは言うを俟たない。第四の信用制度が、貸付資本の蓄積を助長し、供給を増大させることについても多言を要しないであらう。〔Kapital III Ss. 69-9, Ss. 80-1, S. 82〕このようにみてみると、資本の蓄積が不斷に進められる場合の貸付資本の供給は、現實資本の蓄積の擴大の結果だともいえようが、また一部には、それとは全く異つた事情からもなされうるのであつて、場合によつては、現實蓄積の停滞の結果として、貸付資本の蓄積が増加することもありうるといえる。〔Kapital III S. 82〕 つぎに貸付資本にたいする需要を規定する基本的欲求についても、第一に、純粹の消費的需要の充足、第二に、現實資本の循環過程の必要、第三に、有價證券にたいする請求權の運動のための要求というように要約して考えてみよう。第一の消費信用は、資本主義經濟の條件のもとでは、むしろ高利貸信用に直結さるべきであつて、この消費貸付が大きな意義をもつのは、國家信用の領域においてであり、それが信用市場にもたらす影響には輕視できぬものがあるといえよう。第二の需要は、貸付資本にたいする需要の主要な部分を占めるものであつて、ますます擴大されていく資本主義經濟の進行にもとづ

くものであり、利子率の上昇をもたらす有力な原因でもある。[Kapital III S. 465] ところが、マルクスはこの需要が供給ほど強力ではないとみるのであつて、ここに利子率の低下傾向の基本的原因をもとめているかのごとくである。第三の需要の増大については、有價証券の運動が、現實資本の運動とは獨立に、これと相並んで進められるものである以上、そこに巨額の貸付資本の必要とされることはいうまでもない。さて、利子率の運動法則は、實はこのような貸付資本の需給の運動の法則の反映にすぎないこととなるのであつて、マルクスは、いかなる比率で、利潤が貸付資本家と機能資本家との間に分配されるかが、全く偶然的なしかも純粹に Empirisch な事柄である [Kapital III S. 387] といふところに、利子と利潤との相異をとらえている。さきにもみたごとく、利子率に *Natürliche* なものではなく、*Mittlerer Zinsfuß* とか *Durchschnittszinsfuß* が、もともと一般的法則によつてその限界を確定しようるものでなく、[Kapital III SS. 386—87] ただ、それが、多年の間には、平均利潤率によつて決定される [Kapital III S. 377] とみているのであるが、この平均利潤率は、ただ傾向としてのみあらわれるものであり、理論的な研究をまつて始めて確認される [Kapital III S. 427] のにたいして、平均利子率にしろ、その時々々の市場利子率にしろ、それは劃一的なもの、手にとつてみることのできる大きさとしてあらわれるからであるとみる。[Kapital III S. 387] したがつて、また利子率は、氣象臺の報告が晴雨計・寒暑計の状態を示すよりも、ヨリ正確に示すことができるという。[Kapital III S. 427] ところで、利子と利潤とは、このように異つた要因にもとづいて決定されるから、それぞれの運動は、並行的には行われないうで、利潤率が低下するのに、利子率が騰貴することも可能であり、またその逆もありうる。といつて、兩者の間に、一般的なもの傾向を辿ることを否定はしない。すなわち、一般的利潤率の相對的不變性が、中位的な利子率 (Average rate, Common rate of interest) の不變的な性質のうえにあらわれる [Kapital III S. 400] とみるのみならず、利潤率と利子率とがともに低下する傾向をもつていふ。この利子率の低下傾向は、もとより、利子が利潤の一部であ

り、利子の最高限度をなす利潤率がそもそも低下傾向をもつというところにその決定的根據があるとはいへ、マルクスは、利子率の變動が、信用の状態などが不變であるとすれば、一つに貸付資本の供給に依存するとみる。*(Kapitalismus)*とて、資本主義經濟の進行は、さきに見たごとく、ますます多くの貸付資本の蓄積を伴い、その結果、貸付資本の供給を増加させるが、需要の増大は、比較的緩慢である。そのよつてくるところは、貨幣資本家の意義の増大と 金利生活者の數の増加であり、さらに 信用と信用組織の發展そのものが、貨幣資本と所得を貸付資本の運動領域へ吸引するからであり、*(Kapitalismus)* 一般的傾向として、貸付資本の供給の増大は、需要の増大よりも急速に行われるからである。ここに利潤率の變動から全く獨立しても、*Tendenz zum Fallen des Zinsfußes* が導きだされるとみる。<sup>\*\*</sup>

\* この貨幣形態における資本の遊離休息、追加の法則については、R. Hilferding; *Das Finanzkapital*, 1927 Kap. IV に詳述されている。

\*\* ヒルファーディングによれば、マルクスは利子率低下の傾向が貸付資本の需要にたいする現存の金準備の割合が、つねに順調になるといふこと、つまり金準備が貸付資本の需要よりもヨリ急速に増大することを前提とする。*(Hilferding; Das Finanzkapital, 1927, S. 107)*とみ、この前提が確認できぬとし、利子率低下の傾向というマルクスの主張を一擲する。ところが、マルクスは、貸付資本量と貨幣量との關係について、この貸付けうべき貨幣資本數量は、流通貨幣の數量とは異り、それから獨立し、*(Kapital III S. 545)* したがつて、また、利子率の高低は流通貨幣數量の如何にはかかわらぬ。*(Kapital III S. 565)* とみている。マルクスによれば、相對的に少量の流通手段をもつて多額の預金を成立させることができるという可能性は、(一)同一の個貨をもつてなされる購買・支拂の度數(二)この個貨を預金して銀行に歸屬させ、それが購買・支拂手段として反覆する機能を預金の更新によつて媒介させるようにする復歸運動の度數に依存していることを附記せねばならぬ。*(Kapital III S. 565)* いづれにしても金準備と信用との關係は、マルクスの立場からみても、決して單純ではないとおもう。たとい金準備が信用擴張の究極の限界をなすものであるとしても、だからといつて、金準備の増大と貸付資本量の蓄積の増大との間に等號をひかねばな

らぬということにはならないであろう。のちにみるごとく、金の存在量によつて規定される信用擴張の限界は、貸付資本の蓄積の限界をなしているが、金の運動と貸付資本の數量の運動における並行性を規定しているものではないといつてよい。

わかれは、ここで、マルクス自ら「貸主對借主間の競争と、それからもたらされる貨幣市場の *Kürzen Schwankungen* を考察の圏外におく」(Kapital III, S. 331) と前提していることを銘記せねばならぬ。かくして、信用市場の短期變動については、われわれは「資本論」に何ものをも期待することはできないわけである。

さきにもいつたように、資本主義經濟のもとでは、あらゆる貨幣額が、單なる貸付行爲によつて、すなわち銀行への預け入れによつて、貸付資本に轉化されると観るのであるから、すべての貸付資本の運動法則は、*Bankkapital* の運動法則にしたがうものだということにもなる。もちろん、ここでいう銀行資本は、すべての銀行資金、すなわち銀行の手を通過するすべての貸付資本の意味とみてよい。ところで銀行が、一面において、機能資本家のために貨幣の出納と準備金の保管などの技術的操作を行うという貨幣取扱的な性格をもつと同時に、貸付資本の管理、したがつて貸付追加資本の供給という役割を、あわせになうことは、これまでのところから想像に難くない。したがつて、銀行の機能をば、媒介的な機能と創造的なその二つの面から考察することも、決して不當だともいえないであろう。ただ、この點についても、他の銀行論との關聯をかえりみると、マルクスのそれが、つねに金融市場という狭き視野に踞踏することなく、資本の運動形態に結びつけて、その分析がなされているところに、その異色があるといえよう。まづ、媒介的機能から考察してみよう。いまこれを發生史的視點からみれば、債權者・債務者間の支拂の約束としての商業手形は、それ自身支拂手段として流通し、それが相殺される限り、貨幣としての機能を果すという點に關聯して、銀行の貨幣取扱的な機能が、まづ前景に浮び出されてくる。というのは、本來ならば商業手形が支拂手段として果すべき支拂の決済が、銀行による手形の割引によつて、小切手の流通(預金の移轉)を通じてなされるからである。さらに進めば、銀行は有價證券その他の擔保にたいして貸付を行うことになるであろう。ともかく、貨幣資本

の管理という側面からみた銀行の機能は、貸付けうる貨幣資本を大量的に自己の手に集積する點にあり、これがために、個々の貨幣貸付者に代つて銀行が一切の貨幣貸付者の代表として、機能資本家と對立し、他方また、彼らは、全商業界のために借受をなすのであるから、一切の貸主にたいして借主を集積することとなる。このようにして、銀行は、一方では貨幣資本の貨幣貸付者の集中を代表すると同時に、他方では借主の集中を代表するとみる。[Kapital III S. 48]しかし、この段階における貸付は、 $G-W \dots P \dots W \rightarrow G$  における  $W \rightarrow G$  の段階における銀行の介入であり、貨幣取扱資本としての銀行の機能にとどまり、それがいかほど巨大なる信用現象とみえるにしても、いまだ本來的な貸付が問題となつていないというわけである。というのは、手形割引によつて前貸がなされる場合には、外觀的な前貸の形態さえも消え失せて、純粹の賣買が行われるとみるのであつて、手形が裏書によつて銀行の所有に移されるのと逆に、貨幣が取引客の所有に移され、取引客の側からの返済ということはここでは問題にならないとみるからである。ただ、手形の割引によつて、資本の前貸が行われるのは、*Reitwechsel* にのみ限られ、正常の割引營業においては、資本をもつてしても、貨幣をもつてしても銀行の取引客は、何らの前貸をもうけるものではなく、ただ販賣した商品の代價として、貨幣を受取るだけであるといふわけである。[Kapital III S. 49, S. 57-58]さらに、有價證券その他の擔保にたいしての貸付についても、それは返還を條件として、彼に貨幣が支拂われるといふ意味の前貸であるが、この場合にも貨幣の前貸が行われる。資本の前貸は行われないとみるのである。[Kapital III S. 48-9, S. 57-58]さきにもみたように、マルクスのいう本來の貸付とは、銀行が機能資本家に、その支配しうる資本をそれだけ大ならしめるといふ嚴密な意味での追加資本の貸付であり、 $G-G-W \dots P \dots W \rightarrow G \rightarrow G$  における初項の  $G$  と末項の  $G$  の運動としてあらわれるものである。いま、このような銀行信用の一つの側面としての銀行への資本流入の事情についてみるに、遊休資本のうち、産業的遊資は、産業資本の循環過程から發生するものからなり、社會的遊資は、金利生活者

の蓄積、労働者の勞賃、保險的性質をもつた貨幣貯藏、資本家の所得、保險料、政治團體・公共團體・労働組合の資金などからなるものであり、前者は、銀行によつて、貸付資本に轉化され、〔Kapital III Ss. 439-440〕かくして、銀行は總會の資本の利用を強化させ、利用されない資本を最低限にまで減少せしめ、後者は、銀行制度の發展につれて、とくに預金利子の支拂が始まるや否や、銀行に預け入れられることになるものであつて、銀行は、單獨では貨幣資本としての機能を果すことのできない零細な金額を蒐集し、一つの貨幣力を形成するのであつて、このような零細な金額を蒐集することは、銀行制度の特殊の作用として、本來の貨幣資本家と借主との間の媒介者という機能から區別されねばならぬとする。〔Kapital III Ss. 439-440〕もとより、これらの貸付資本の形成は、他面において、それを資本として利用することの可能性、すなわち、銀行からの資本流出事情によつて規定されている。通常、銀行の貸出業務は、借受者が何ら擔保を供せず貸付をうくる場合、有價證券を擔保として貸付をうくる場合、手形割引によつて前貸をうける場合にわけられるが、マルクスは、この第一の場合、すなわち、單純に借受者自身の人的信用のみにもとづいて、銀行から貸付を許される場合にのみ、本來の意味での企業にたいする追加資本の供給が行われるものとみている。といふのは、取引客の受取るものは單なる貨幣ではなく、貨幣資本であるからである。〔Kapital III S. 438, Ss. 437-5〕ここでは、新たな信用關係が、銀行と借主との間に生じ、商業信用取引が銀行信用取引にとつて代るとみている。このように近代銀行が、媒介機能として貨幣取扱と追加資本供給の二重の機能をもつとすれば、銀行資本のあげる利得部分のうちには、貸付資本の利子のほかに、貨幣取扱としてうくべき *Gebühren* があるともみなければならないのであつて、この部分は、マルクスによれば商業上の利潤であつて利子ではありえない。もちろん、實効においては、この面のみが明確な姿であられるわけではないが、理論的には、これを區別して考えるべきであり、兩者の混同は、利子の錯覺以外のなものでもないということにならう。つぎに、銀行の創造的な機能とは、購買・支拂手段を造り出

し、これを貸付資本に轉化させるという機能にして、これは、幾多の方法で行われる。この種の銀行業務のうち、最も典型的なものは Banknote の發行と預金の創造である。すでにみたごとく、銀行券は個人手形を代用する信用證券 (Kapital III s. 405) にほかならないのであり、したがつてその分量は、全く取引上の必要によつて決定され、その流通は、中央銀行の意思から獨立していると同時に、また同銀行の地窖内に保有されている流通銀行券の兌換保證たるべき金準備の状態からも獨立している (Kapital III s. 567, s. 568, s. 571) とみるのである。しかし、ひとたび發行されるや、それは一定の期間、流通界で流通手段としての役割を果すものであつて、この發行が、信用形態として、とくに目立つた重要なものと考えられるのは、第一に、この種の信用貨幣が單なる商業上の流通から一般的流通に入り、ここで貨幣として機能し、第二に、それが實際のところ國民信用によつて支持され、多かれ少かれ、法定の支拂手段であるからであるとみる。 (Kapital III s. 405) もし、銀行が、金屬準備によつて保證されない銀行券を發行するとすれば、この價値表章は、單なる流通手段を形成するだけでなく、同時にまた銀行にとつては、この保證されない銀行券の名目的價値に等しい額の何らかの追加資本としてあらわれ、それは銀行に追加利潤をもたらすことになるという、さらに全體としての銀行制度をとつてみた場合に、貸付の多くは、すでに銀行の蒐集した貨幣資本をもつてなされ、貸付の一定の部分は、預金なしに可能な筈であるが、マルクスが Krediterschöpfung の可能性を認めていることは、銀行が紙券を發行する代りに、A にたいして帳簿上の信用を開設した場合に、債務者たる A は想像上の預金者となる (Kapital III s. 568) とする思考からも首肯しやすいところであるが、ヨリ概括的に、(一) 自己の銀行券を發行することによつて、(二) 二十一日以内の通用期間をもつが、銀行は發行直後に現金で支拂を受けるところのロンドン宛爲替手形を發行することによつて、(三) 少くとも地方だけについていえば、主として、銀行の裏書のために信用能力をあたえられた割引手形を振出すことによつて、信用と資本をつくり出す (Kapital III s. 569) ことを説き示している。このようにして、貸付資本

を創り出し、購買・支拂手段を機能資本家に交附することによつて、銀行は現實資本の循環を促進するのであるが、〔Kapital III S. 484-490〕ここで看逃しえない點は、貸付けうべき貨幣資本の量が、實際のところ、現實資本の蓄積から全く獨立して増大する（Schwebendes Kapital, floating capital）〔Kapital III S. 580〕にしても、その貸付資本が現實資本に轉化されるのは、資本の擴大再生産の可能性が現存するからに他ならないという點であろう。ともかく、銀行資本の個々の部分が、たといその由來を異にするにしても、銀行は單に商品と貨幣の轉形過程を容易にするだけでなく、またそれを促進させ、資本の循環を強化させ、その處分を委ねられた貸付資本を分配するのみでなく、他の形態の資本と所得を貸付資本に轉化させ、その造り出した流通手段を貸付資本に轉化させることによつて、貸付資本を創造することが明らかとされたのであるが、ここでマルクスの叙述が盡きるのではない。むしろこのような銀行制度が、資本の分配をば社會的機能として、私的資本家と高利貸業者の手からとりあげてしまうと同時に、ここに銀行と信用の Die schöne Verschlingung がうまれ、〔Kapital III S. 583〕恐慌と詐欺を助長する最も有力な手段の一つとなることを説いてやまなす〔Kapital III S. 685〕

\* マルクスとまさしく對照的な立場にたつ銀行論としては、次のこときものがあげらるべきであらう。W. Leaf; Banking, 1935, p. 24. K. Kries; Geld und Kredit, 1931. Bd II S. 235. Macleod; The Theory of Credit, 1898. Vol. II p. 364, 594. J. Schumpeter; A. a. O. S. 153. A. Hahn; A. a. O. S. 30, 51. たとい、マルクスの立場からするにしても、これらの見解を、産業資本家乃至は銀行資本家の頭腦にやどる錯倒的映像と處理しきれぬかどうかは問題である。トラハテンベルグによれば、銀行とは貸付資本の運動を組織し、實現させる特殊の資本主義的企業であり、それは次のようにあらわされるとみている。すなわち、(イ)銀行は貸付資本の移轉の媒介者である。銀行は貨幣資本家の資産を産業・商業資本家に、つまり機能資本家に移轉させる。(ロ)銀行は産業・商業資本の貨幣形態を貸付資本に轉化させる。(ハ)銀行は所得を貸付資本に轉化させる。(ニ)銀行は貨幣流通の法則により、またこの法則によつて設定された範囲内で、直接に購買・支拂手段を造り出し、資本循環の法則に對應してそれを貸付資本に轉化させると。(前掲書、二二九頁、二三六―七頁)

\*\*\* 一般的にいつて、イギリスの銀行は、取扱業務を專營する點において純粹の意味の預金銀行にほかならず、これに反して、ドイツのそれは、企業への追加資本の供給を主とすることによつて工業銀行の性格をおびているといえる。

\*\*\* トラハテンベルグによれば、ハーンの誤謬は、彼がこの購買・支拂手段を造り出すという銀行の能力を強調した點にあるのではない。このことは、むしろ、彼の功績であつて、彼を他のブルジョア經濟學の代表者たちから有利に區別するものである。その誤謬は次の點にある。第一に、この機能が銀行を特質づけるものとしてゐるが、實際にはこの機能は獨立的な機能ではあるが、銀行の他の機能によつて條件づけられてゐる。第二に、この能力は無制限ではなく、極めて制限されていて、國民經濟の客觀的條件によつて規定されてゐる。第三に、銀行は資本を造り出すのではなくて貸付資本をつくり出すのである。(前掲書、二六四―五頁)ともかく、マルクスが、貸付資本の造出という銀行機能を否定していると即斷するについては、疑問の余地がある。

### III

これまでのところから導き出される歸結は貸付資本と現實資本とは、資本という統一物の對立的な構成要素であり、この獨立的な運動は、兩者間の矛盾をつくり出し、この統一性は、恐慌においてのみ恢復されるといへよう。したがつて、マルクスの立場が、貸付資本と産業資本との統一性のみをみる見方、またそこにただ對立のみをみる態度、さらに貸付資本の姿が産業資本のその單なる反映にすぎないと考へる思考とはもとよりのこと、貸付資本の運動が現實資本の運動と無關係であるとする見解と全く相容れないことは、おのづから明瞭である。マルクスによれば、總資本が生産手段の形態をとる限り、生産手段を購買して利用するひとびとの存在しないのに、總資本が貨幣資本に轉化されることがありえないことであり、また資本主義のもとにおいて、資本が生産資本として機能せずして、余剩價值の一部にすぎない利子をもたらすであろうと説くことが、無意味なわざなのである。(Kapital III, S. 412) といへ、この問題は、マルクス自ら告白しているごとく、信用制度についての困難無比なものである。果して、貨幣資本

の蓄積は、如何なる程度まで現實資本の蓄積の指標となり、如何なる程度までその指標とならないのであろうか。また、貨幣の逼迫（貸付資本の不足）は如何なる程度まで、現實資本の不足を言いあらわし、他方如何なる程度までそれ自體としての貨幣の不足と一致するのだろうか。（Kapital III S. 565）この問題への一つの接近として、ここでは、信用と現實資本の關聯についてのマルクスの所論に一瞥をあたえねばならぬ。

まづ、商業信用についてみるに、それが、商品流通過程を媒介し、現實資本の流通過程における運動を媒介するにすぎないことは、すでにみたところである。したがつて、商業信用は、商品資本・貨幣資本の *Pléthora* が感ぜられる範圍内で、産業資本そのものの運動面に發生するというわけである（Kapital III S. 565）とすれば、商業信用が、資本の循環に携つてゐる資本の限界内に限られ、しかも、この信用面において生じてくる相互的な支拂の相殺が、互にあたえる資本の回流そのものに、かかつてゐることは、いうまでもないこととなる。もし支拂の相殺がある事情から不可能となれば、支拂のための貨幣準備が要求されるのであるから、個々の機能資本家からみれば、彼のあたえうる信用の限界は、自からの準備資本によつて決定されるわけである。（Kapital III S. 564）しかし、彼は他面において、信用をうけるのであるから、この準備資本の額が、彼の債權額と債務額との差額に等しくなければならぬことは明瞭である。しかし、總資本の立場からみれば、商業信用は、機能資本の運動の内部で行われるものである限り、その限界が、再生産の流動性、すなわち、個々の生産部門間の均衡度如何によつて決定され、この均衡が攪亂されればされるほど、商業信用の限界は狭められるという。（Kapital III S. 564）このような商業信用の限界が、銀行信用によつて擴張され、機能資本家の準備金の機能が銀行資本によつて補足され、商業信用のこの直接の依存性が否定されることとなる。<sup>\*\*</sup>

\* マルクスは現實資本の蓄積については、輸出入統計の上から一つの標準が與えられるとしている。（Kapital III S. 563）

※ いまかりに、銀行の貨幣取扱的職能としての貸付についてのみ考えるならば、マルクスの立場からすれば、その貸付は商品流通にもとづくものによらず、これは、いまだ銀行の領域に入るものではなく、したがって、信用創造を導くべき論理的な根拠がない筈である。シユムペーターの所論は、まさしくこれと對立しているといえよう。(Schumpeter; A. a. O. SS. 152—3)

つぎに、近代信用の局面についてみるに、マルクスは、現實資本の供給と貨幣資本のそれとの間に、暗黙の結合があることは疑をいれないし、同様に、貨幣資本にたいする機能資本家の需要が現實における生産上の事情によつて決定されることも疑をいれないとみる。(Kapital III, S. 485) とすれば、ますます大規模に擴大されていく資本主義經濟のもとにおいて、ますます多くの貸付資本が蓄積され、一般的にいえば、後者が前者を反映するわけである。(Kapital III, S. 485) しかし、マルクスは、貸付資本の如何なる増殖も、總べて現實資本の蓄積と再生産過程の擴大とを示すとは限らず、恐慌直後の産業循環の段階においては、貸付資本の大量がねかされていること、(Kapital III, S. 529) 再生産過程が緊張過度の状態に先行していた隆昌状態に歸結する段階こそ、低き利子率としたがつて貸付資本の相對的な豊富とが、産業資本の現實的増大に歸一する唯一の時點であると説く。(Kapital III, SS. 532—3) したがつて、兩者の運動が並行的に進められるのは、資本主義經濟の發展過程が圓滑に行われる場合においてのみであるといえよう。ところが、われわれは、すでにⅡにおいて、貸付資本の需給・利子の運動法則について考察し、信用市場が生産過程を反映することは認められるにしても、貸付資本の蓄積が、現實資本の蓄積よりもヨリ大規模に行はれ、兩者の法則と運動の間には、一定の依存關係と並行關係はあつても、それが必然的でない所以をよみとつたのである。マルクスのいう困難無比の點とは、實にここにあつたといわねばならない。もし、貸付資本の蓄積と現實資本の蓄積との間の關聯を否定せんか、無から資本を造出するという信用の magisch な力を信ずる信用理論への偏向に陥るであろうし、マルクスの立場において、すべての資本蓄積が、その源泉を不拂労働にもとづくという基本的事實を抹殺することともなるであろう。

もしまた、貸付資本の運動の獨立性を否定せんか、ますます甚しくなる資本の所有と機能との分離という事實を看過し、全體としての資本主義經濟の寄生性の成長という現實の事實を否定せざるをえないのである。われわれは、ここで蓄積を含む再生産の過程にあつて、貸付、追加資本の供給と貨幣取扱との兩機能の必然的結合たる銀行の役割が、いかに規制せられるかを追究することによつて貸付資本と現實資本の關聯を考察してみることとしたい。<sup>\*</sup>周知のごとく、再生産表式の示すところは、社會總資本の循環におけるWの段階、したがつてWを構成する總資本の内部における素材・價值補填の運動の姿容であつて、そこでは、總資本を構成する個別資本の循環の週期差とか、個々の資本家間の取引の時間的な不均等性を捨象して構成されたものであるといえよう。まづ、單純再生産について、信用の問題となるのは、 $I(v+m)$ と $II_c$ との部外交換と $I_c$ 、 $II(v+m)$ の内部交換である。まづ $I_c$ の運動は、二つの途、すなわち、かかる現物を生産した企業におけるその使用と、第一部門内の個々の企業家間の相互取引とにわかれる。後者の運動の場合に、商業信用の成立をみ、ここでは、商業信用關係の成立と、その相殺にもとづく消滅とが廣汎な規模において行われ、銀行の貨幣取扱業務が行われうる。ここで、 $c$ のうちの固定資本の價值補填部分の問題があるが、銀行はこれまで蓄積された準備金の保管・支拂と、新たに蓄積される貨幣準備の貯水池の役割を演ずるとみてよい。 $I(v+m)$ と $II_c$ との取引は、第二部門 $c$ の補填運動であるとともに、第一部門の所得の實現過程である。この場合、所得預金を措いて問わないとすれば、ここでは、恐らく現金の流通を必要とし、消費信用を捨象すれば、貨幣取扱者としての銀行の介入する余地もない。同じことは $II(v+m)$ についてもいえるであろう。<sup>\*\*</sup>なお、第二部門 $c$ のうちの固定資本の價值補填部分については、さきにも述べた第一部門 $c$ の場合と同じである。要するに、單純再生産の場合における信用の役割は銀行の貨幣取扱的機能のみであるといえる。すなわち、ここで流通せしめられるものは、通貨の前貸であつて資本の前貸ではない。(Kapital III, s. 550) ところが擴張再生産の場合についてみるに、ここで

は、兩部門の  $m$  部分より控除されて投資せられる新投資部門が問題となるであろう。このうち第一部門の  $E(\circ)$  は内部の取引により解決され、 $E(\Delta)$  は第二部門の  $E(\circ)$  部分と取引される。同様に、第二部門の  $E(\Delta)$  部分は、第二部門の内部において解決せられ、 $E(\circ)$  部分は、第一部門との取引によつて、生産手段の形態を獲得することとなる。まづ、第一部門の蓄積部分については、その再生産年度において、貨幣準備金を蓄積する資本家と現實に追加資本を獲得すべき資本家とを仲介する銀行は、信用授與という形態において、 $E(\circ)$  と  $m(\Delta)$  をば貸付ける。このことは、第二部門の蓄積部分についても同様である。このようにみてくると、擴張再生産の場合における信用の役割は、さきに觸れた資本の集中の槓杆であるということができる。

\* 拙稿「資本蓄積論」、参照。

\*\* ハーン・ホウトレーの *Baracklose Wirtschaft, Credit without money* という假定は、現金の介入なくして行われうるといふ再生産の機構における銀行の地位を明かにするにすぎないのであつて、本來の貸付は、ここでは全く問題になつていないといふことになる。さらに帳簿振替と現金流通との割合を決定する契機は、再生産の過程において、如何なる部分が所得の實現を意味するかに求められなくてはならぬということになる。

\*\*\* マルクスの表式が、尨大な固定資本の集積を捨象してなされていること、それと信用との關係が不問にふせられていることは、とくに注目すべきであらう。

さらに、われわれは、現實資本の轉化形態をとらないとされている擬制資本に、考察を向けなければならない。すでにみたごとく、産業構造の變化・株式組織の普及・貸付資本の重要性の増大・資本所有と機能との分離の甚しくなる結果として、擬制資本の蓄積は増大し、貸付資本の驚くべき部分が、その投下形態を有價證券に見出すわけである。ところが、この蓄積は、現實資本の蓄積とは直接の關係はなく、所得にたいする請求權の蓄積にとどまり、最初に貸付けられて、とうの昔支出されてしまつた資本の代りに發行されるこの債務證券、減却された資本の *Papiernen*

Duplicateでさえ、それが賣れる商品であり、したがつて資本に再轉化することのできるものである限り、その所有者にとり資本として機能するものである。*(Capital III, S. 501)*なるほど、それは、鐵道や、鑛山や、汽船や、その他のものの蓄積をあらわす限り、現實的な再生産過程の擴大を表現するといえるであろうが、これらの紙券は、それ自身商品として取引され、資本價值として流通するものであるという點からみれば、まさに幻想的なものであつて、その價值の大きさは、現實資本の運論から全く獨立して増減するといわねばならない。*(Capital III, S. 521, S. 539)*このようにみても、擬制資本の増大は、現實資本が増大する場合にも、變化しない場合にも、否それが減少する場合でも、さらに株式にたいする所得が變化しない場合でも行われうることとなる。かくして、その運動と移轉は、株式賭博の純粹の結果となり*(Capital III, S. 541)*非常に鋭い變動ということが、擬制資本の蓄積の特質をなすとともに生産過程のあらゆる攪亂をヨリ敏感に信用市場にあたえ、結局において、擬制資本の運動は、貸付資本の矛盾をますます激しくさせ、再生産過程の矛盾をますます尖鋭化させ、他方において全體としての資本主義經濟の困難を最も鋭くあらわすところである。マルクスは、信用と信用制度の發展の結果としてのその蓄積は、信用の二重性——それは一方では、資本主義的生産の發條たる他人の労働の搾取による富の蓄積を、最も純粹にして最も巨大な賭博及び詐欺の制度に發展させ、且つ社會的富を利用する僅かな人々をますます制限させると同時に、他方では、また新たな生産組織への過渡的形態をなしている——と結んでいる。*(Capital III, S. 483)*最後に、銀行の機能からみた信用の限界について、觸れておこう。順序として、銀行機能の媒介的な面についてみるに、その機能が、銀行の外部にある資本の循環過程によつて制約されることは、いふまでもないところであろうが、しかし、銀行が、その能動的な業務によつて、貸付資本の形成と蓄積をある程度まで刺戟できることは否定できぬであろう。つぎに、銀行の創造的な役割についてみるに、さきにみたごとく、銀行による購買・支拂手段の造出は、貨幣流通の法則によつて、換言すれば商品流通の法則によつ

て規定されるとみている。[Kapitel I S. 125, S. 145]しかし、銀行券の發行とその貸付資本への轉化が、單に現存する現實資本の再分配をひき起すだけでなく、資本の再生産過程を強化させ、Potentielle Kapitalを流通過程に引き入れることを否定はできぬわけで、この意味では、可能性を現實化させる信用の創造的機能を認めねばならぬ。しかし、これが可能なのは、あたえられた具體的條件のもとで、客觀的な事情がどれだけ現實資本の擴張を許すかというその程度にかかつているということになるであろう。さらに、預金を創造し、それを貸付資本に轉化させる銀行の機能についてみるに、預金は、それが現金を受取ることなしに、相殺される場合のみ、貨幣にとつて代ることができ（Kapitel III S. 555）のであるから、現金なしに實現される商品流通は、ただ單に預金の基礎をなすばかりでなく、その創造の限界を規定していることとなる。しかし、この場合においても、もし、再生産の擴張の可能性さえあれば、貸付が行われうることは否み難い。かくして、銀行券の發行と預金の創造にみられる信用の擴張は、貨幣流通の法則と、すでに流通しているか、またはこれから流通しようとしている現實資本の現存に、その限界を見出すと結論することができらるであろう。

\* マルクスの立場は、信用と銀行制度の發展を、純粹に技術的な意義において考える思考と全く相容れないものである。

\*\* 信用創造論については、多くの理論のあるところであるが、マルクスの立場からみれば、信用に不可思議な力を豫想したり、期待したりすることは、再生産表式における實現不可能の救済を、信用にもとめる立場と歸を一にする錯倒てしかないといえよう。

貸付資本の運動は、他面において、それ自體獨立性をもつているために、信用はややもすると限界を踏みこえ易い。[Kapitel III S. 552] マルクスによれば、この對立的な相互に獨立した要素の統一は、恐慌によつてのみ恢復されるとみるのであるが、その論據は、つきのごとくである。すなわち——すでにみたごとく、貨幣が、價值の獨立した形態として商品に對立し、また、交換價值が貨幣において獨立した形態をうけねばならぬということは資本主義生産の基

礎であり、このことは、ある一定の商品が價值尺度となることによつてのみ可能である。このことは、また二重の點に、すなわち、第一は、金融逼迫期においては突然貨幣が唯一の支拂手段として絶對的に商品に對立するに至り、そのため商品是一般的に價值減少をきたし、これを貨幣に轉化せしめることが不能となる點、第二に、信用貨幣それ自身は、その名目的價值の高さにおいて、絶對的に現實貨幣を代表する限りにおいてのみ貨幣たるにすぎないという點に示されている。信用貨幣の上に生ずる一つの價值減少は、一切の既存事情を動搖させ、商品の價值は貨幣における自己の夢幻的な、かつ獨立せる存在を確實にするために犠牲に供せられる。労働の社會的性質が商品の貨幣存在として、したがつて現實的生産の外部に存在する一つの物としてあらわれる限り、現實的恐慌から獨立せるものとしての、またそれを強めるものとしての Geldkrise はさけ難いと。[Kapital III Ss. 561-2] マルクスによれば、この恐慌期には、信用制度が突如として貨幣制度に轉換されるとみる。[Kapital III S. 583] なぜなら、——「富の社會的存在は、社會的富の現實的要素の彼岸にあるものとして、社會的富の現實的要素と並立し、かつその外部にある物として、商品としてあらわれる。生産の圓滑なときは、このことが忘れられ、富の社會的形態たる意味においては、これまた同様のものである信用が、貨幣を驅逐してその位置を奪う。生産物の貨幣形態をば、單なる消極的なもの、理想的なものとして、單なる觀念としてあらわれしめるものは、生産の社會的性質にたいする信頼である。しかし、信用が動搖するや一切の現實的な富を現實において、また突如として、貨幣たる金に轉化せしめねばならぬという要求が起る。この狂氣の要求は、しかし信用制度それ自身のうちから必然的にうまれてくる」と。[Kapital III S. 265] さらにまた、「忘れてならぬことがある。第一に、貴金屬の形態における貨幣は、信用制度がその性質上決して離れ去ることのできぬ基底だということ、第二に、信用制度たるものは、資本と土地所有の形態における社會的生産手段が、私個人たちの手に獨占されることを前提とするものであるから、それ自身資本主義生産方法の内在的な一形態であると同時に、また

他方資本主義生産方法をその最も高き最終可能的な形態に發展せしむる一つの treibende Kraft である」と。

[Kapital III s. 654] 要するに 'Das Monetarssystem ist wesentlich katholisch, das Kreditssystem wesentlich protestantisch' [Kapital III s. 640] である。

\* マルクスは、貸付資本の Überflus について、それが恐慌後の循環初期、すなわち産業資本が、生産・商品資本の形で收縮する時、營業が恢復に向い、商業信用が銀行信用を要すること少ない時期にあらわれること、[Kapital III s. 539] 過剰資本による投資部面の不足という困難は、資本主義生産に制限のあること以外の何もを示していないとみる。[Kapital III s. 552]

V

マルクスの信用理論については、なお論究すべきところ尠くないのであるが、ここで二・三の所感を述べて、拙稿を結ぶこととしたい。以上の解釋が、或はマルクスの見解の無理解のため、複雑なマルクスの叙述のなかで途方にくれることなかりしかを、恐れつつも、まづ第一に指摘せねばならぬ點は、銀行學派とくに Fiske, Fullarton の、長き年月にわたるただどしい、しかし嚴正な分析からえられた所産を、自らの哲學的整理によつて、秩序整然たる一つの貨幣・信用理論の體系にまでつくりあげたマルクスの手腕に尠からざる關心をいだかざるをえないという點である。しかし、このことによつて果して、どれほどの誤謬を冒し、またどれほどの功績を遺したかについては、恐らく議論のわかれるところであり、いま、輕々しく斷定することは許されない。もし、マルクスの信用理論をば、そのとるところの唯物辨證法的立場から眞正に解釋するとすれば、恐らく、第二章を中心に、信用の役割が、階級關係の量的・質的進展にあることを強調されねばならぬであろうし、また、すべての問題の焦點をここにもとめるべきであらう。そのことを知りつつ、敢てこの點を深く追求することなく、殆んどとりあげえなかつた所以は、その哲學的

思考に、依然として解かれざる疑問の尠くないことに、もとづいているといわねばならぬ。第二は、繰返し指摘したごとく、マルクスの信用理論が、「生産關係」をその根柢にもつのであるが、この場合、この「生産關係」が必ずしもそれ自體として思考されているものではなく、あくまで市場理論による翻譯を通じて把えられているかの如き感を抱かしめ、その論理の展開乃至序列が、單純に割切れうるかのごとくであつて、必ずしもそうではないという點である。或は、貨幣經濟自體に把握の極めて至難な性格があるともいえるであろうが、マルクスの思考において、商品流通と別個に貨幣流通を想定すること自體が許し難いところであり、まして、かかる貨幣流通を規制するものとして商品生産流通を導入する思考態度には、もとより組し難いものといつてよいであろう。マルクスにおいて、あくまで、この二つの局面をば、單純に切り離して思考されていないという點について、いま一つの關心を抱かざるをえない。二つの局面を對立的にみてとり、そこから導き出した *Schema* にしばしば疑問の余地を残しつつ、このマルクスの思考を顧みるとき、たといそのとる唯物辯證法について論難の余地が残されているにしろ、そこに、一つの積極的な解答が提起されている限り、その意義を輕視するわけにいかない。假に、この論點がとるに足らぬものであるにしろ、マルクス理論の性格をば、長期的視點にもとづくものとして處理するには、余りにも問題が深刻であり、さりとて、マルクスの貨幣論をば、商品即貨幣論の立場によるものと斷定して、眞ちに問題の解決されうるものでもない筈である。信用理論においては、この論點は擴大されて、現實資本と貨幣資本との關聯に進められている。現に、われわれが、證券資本主義ともいわれる事情のもとにおかれても、われわれは、貨幣資本乃至擬制資本の動きにのみ視野を集中して、果して事實認識の徹底化をあくまで主張しうるであろうか。第三は、マルクス理論の「巨視的」「實體的」「量的」把握としての性格が、私經濟的立場からする信用理論——例えば資本蓄積をば貨幣資本の蓄積と同一視するがごとき——貨幣・信用の面に視野を局限し、そこで展開される自由放棄な貨幣信用理論、現實資

本がつねに貨幣資本に追従するとみる理論、無現金經濟を想定する思考などについて、厳しき反省を與えているという點である。しかしマルクス自ら短期分析を企てていない限り、短期的視點にたつ「微視的」・「機能論的」・「關係論的」思考は全く缺如しているといつても過言ではない。このことが一面において、マルクスの理論的基礎づけの強固さを主張しうるかのごとくであつて、他面において現實よりの遊離の甚しさに、限りなく滿されざるものを感じざるをえない。

(一九五三・一・二八)